“シロイカ”漁況と流況との関係についてのノート*（抄録）

森脇晋平

山口県の日本海沿岸水域では，南東流の発達したときに“シロイカ”が補給され，漁獲量が上昇するという関係が見い出されている。しかしながら，このような漁況と流況との関係が，どこでもいつでも成り立つかどうかは調査の余地がある。そうした観点から，ここでは島根県大社沿岸水域から得られた既存のデータに基づいて，“シロイカ”漁況と流況との関係を調べた。漁獲量変動の資料としては，測流点付近の海域で操業する漁船が多数所属している大社町漁業協同組合の仕切伝票から測流期間の毎日の漁獲量と出漁隻数を集計した。流れの計測データは島根県日御碕沖の水深165 *m*の地点で，測流された水深は底層の150 *m*である。調査期間は1981年7月20日から8月10日であった。大社沖では特定の流れが発達したときにではなく，むしろ流れが停滞したときに漁獲は上昇する傾向を示した。漁況と流況との関係は海域によってかなり異なったものであると言えよう。こうした点については今後さらに事例研究を重ねる必要があると思われる。

* 水産海洋研究会報 第47・48号（1985）に発表した。